



通りに、二つに折りますと、六圖のよーになりま
す。

又その次きは風車、これは鉄砲船の、一所残し
た所をも、引り出して七圖のよーにいたします。

次きは二艘船(八圖)、帆掛船(九圖)ですがこれ
は風車を まんなか、ら折ると出来ます。

工夫してこらんなさい。

狼奇談

やまとの翁

翁の御話に出る狼は、時々狐や何かにだまされ
る様な事があつて、至極トンマの様ですけど、眞
事の處は、どーして、中々馬鹿には出来ない獸で
あります。

これは獨この話してありますが、オーベルニー

と申すすまことに寂しい山の中に、一軒のお寺が立って居ました。が、毎年冬になると、坊様たちは、狼のために、甚く困らされる、と申すものは、冬には、森の中に、狼の餌食がなくなる處から、大胆にも此お寺の屋敷内へ、這入り込んで裏庭の邊をワロツイテ居って、誰でも知らないで、出て来る者を取って食はうとする、或は、犬だとか馬だとかを殺して食ふ。だから、冬になるといふと、此お寺は丸で、敵の重圍に陥つたも同然で、皆坊さん等は内に引込んで居るばかり、一寸も外に出ることも出来なければ、命懸けで外からお参りに来る人もないといふ、まことに寂しい、困つた、恐ろしい有様。

處で、或年の冬、そろく此狼騒が始まる！といふ時、此お寺の僧正さんが、近隣の狩人ども

にとりかして、此血腥い怪物を退治して呉れまいかといつて切に願つた、狩人ども、他ならぬ、僧正さまの頼といふので、皆心よく引き受けた。そこで二三日経つて、屈強の狩人ども十二人許り、甲斐くしく身支度して、お寺へ集まつて来て、愈狼狩りを催うさうといふ相談をした。處が生憎此日は、大雪と來たので、とてもこんな鹽梅では狼もやつてはこまいといふので、残念ながら思ひ止ることにした。然るに丁度此日、馬が一匹お寺の中で死んだ。すると狩人の中で一番年の老つた場敷を履んだ一人が、偶然思ひついて、これで一番計略をやつて見ようということになりました。其計略は即ち次の様なのです。

先づ其馬の死屍を、屋敷の真中へ放り出して置いて、そして門の扉へは丈夫な繩で仕掛けをして

一寸と衝くと、すぐガタンピシャンと閉る様に
 て置いて、さて暗くなつてから、狩人どもには各
 自 鐵砲に丸を込めさせて、イザと云はゞ一度に
 切つて放つ様に用意して、方々の窓に忍ばせ、週邊
 の燈火は一切消して眞闇となしそこで以て、大門
 をサツと打ら開いて待つて居る。夜はだん／＼と
 更け渡つて、週邊は森として聲もなく、雪は見る
 降り積つて一面の銀世界。こゝ暫らくは、殆
 んど天地も死んだ許の静けさ。

すると忽ち物凄ひ狼の遠吠が耳に入った。かと
 思ふと、其聲がだん／＼近くに聞えて來た。果然!!!
 眞白な天地に眞黒な狼の一群、お寺の門を見がけ
 て墓地に突進し來つた。突進し來つてすぐに死馬
 の香を嗅ぎ附けたらしく、切りに鼻をならして此
 を馳走を欲しがって居る。併るに不思議にも、門

の中へは一匹も這入つて來るものがない。こゝが
 狼の賢い所で、門内には確に、只ならぬ危険が
 あると考へたので、先づ其邊の事情を探らうと考
 へたのである。そこで、彼等のうなり聲も黙つた
 みんな沈黙を守つて、稍暫らく門を眺めて居つた
 が、やがて、そーつと寺の周圍残らず飛び廻はつ
 て見て、一々其邊の小藪など角から角まで探索し
 て、夫から仰向いて垣の上などを見て居る。

彼是する中に、四十五分間も過ぎた。すると、
 一匹の大きな古狼が、門の前に顯はれたが、ジーン
 と氣を附けて周圍を見廻はしながら、そろ／＼と
 門内へ進み入り、彼方彼方に跳び廻はつて見ては、
 又立ち留つて窺つて居る。處が、門内は何時まで
 も、森として何一つ不思議も起らねば、危険もあ
 りそらもない。

そこで、再び寺院内を嗅ぎ廻はして見て、又更に馬の死骸を嗅いで見た、が、少しも食べない、もーこれで十分安全だと見た所から、急いで、外へ出て仲間を呼びに走った。

一瞬間にして、彼は再び門内へ跳び込んだが、續いて、二十二匹の狼の群が飛び込んで来た。皆が静かに死馬の方へ急いで行ったが、やがて、喝え切つて居た食事を、ムシャ〜と始めた。

すると忽ち、入口の方に當つて、ビシャンガタンと恐そしい響がした、鐵門の戸が落ちたのである。屹驚して、狼どもは一度にパッと散った、そして一時に門へ衝き進んだが、門は既に閉ぢられて居たから、狼狼ふためいて四方八方へ走り廻はって居る。そこへ以て四方の窓から、トーン〜と鐵砲が打ち始まった、是に至つて狼どもは、始め

て自分等が捕はれ物になって、今や正に死地に陥つたことを悟つたのである。

そこで、狼共は皆屋敷の真中へ歸つて来て、彼の最初皆を案内した所の古狼を取り巻いて、大勢で何か宣告でもする様にうなつて居たが、一つの合圖で以て四方から一度に突進して、遂に彼の古狼を、散々に食ひ殺して仕舞つた。

それからは、皆が別に騒ぐ様子もなく、自若として運命に甘んじ伏して悉く射殺されて仕舞つたといふことです。

笑ひの種

▲田舎者が東京へ出て来て、晝飯を食べよと思つて、あるおすし屋へ這入つて おすしを注文しました。『おかみさん このおすしは幾許です』